

2004年8月26日

大学の窓から

中村祐司

「海なし県」と呼ばれる栃木県。厳しい夏の暑さに、海がないのも立つてもいられないほど懐かしくなった時、宇都宮市内を流れる河川を利用した「○○ビーチ」があるという話を聞いた。勇んで出掛けたのだが、そこにはひざほどの、しかも藻が浮いた水面が、いかにも申し訳なさそうに広がっていた。

一瞬躊躇したが、開き直って、クロールではたばた手足を動かしてみた。しかし、川底の泥に沈み込むような感触と、海

エネルギーに敬意

■4

水とは異なる川水のおい、薄茶色がかった水面など、いかんせん勝手が違う。海での経験が体に染み込んでいる者には、どうしようもない違和感が残った。

しかし、周りを見渡せば、子どもたちは喜々として水遊びに興じ、多くの大人はパラソルを開いてくつろいでいた。

河川敷を何とか「ビーチ」風にしようと、傾斜をつけ、砂を敷きつめ、水を流す。海の家に似せた小屋まであった。ビーチづくりに相当なエネルギーが費やされたことは間違いない。冷静に振り返れば、これこそある種のまちづくりではないか。こうした努力を多としなければいけないのかもしれない。

(宇都宮大学国際学部教授)